

「治す努力の否定」と振り子の論理

『吃コミ』NO. 48（4/28 付け）の「吃音とつき合うシリーズ（8）」のシリーズものの中に「治す努力の否定」についての論攷があります。

【読んでいて愕然としました。ちょっと引用してみます。「何故、「どもりを治す努力の否定」という提起をしたのか。」という説明の文です。

言友会が活動を始めるまで、「吃音は治る」との情報が全てだと言っていい。吃音者がよりよく生きるためには、どもりが治る以外にはないと主張が主流であった。当然多くの吃音者は、治す努力の仕方が正しくて、その努力の量が十分であれば、どもりは治ると考えた。努力の正しい方向、つまり治療方法を追い求め、努力を続けた。「どもりは治る、努力しただい」、勤務先の上司から、または親からどもりを治すことを求められた吃音者がいた。しかし、現実には、すべての吃音者に有効な治療法はなく、治らない自分を責めた。自己を否定し、どもりを隠し、話さなければならない場から逃げた。

食べる、吃らないが問題でなく、吃音を否定し、自己を否定することによって、自分の自由な行動が取れないことが吃音の最大の問題なのだ、ということが、吃音者の多くの体験を整理する中で私たちは分かってきた。

治っていない、治療法が確立されていない現実の中で、それでもなお、「治る」「治すべき」という前提は、吃音者の側にも、周りの人々にも、そして社会にも根強くあった。

その前提こそが問題なのだ。大きく流れを変えたい。吃音者自身が変わらなければ、変わらない。気が負いがあつた。肩肘を張らなければ、大きな流れは変わらない。どうすればよいか。

振り子の論理を考えた。

「治る、治す」の一方に極端に振られ過ぎた振り子を本来の位置である真ん中に戻すには、一時は、反対の方向に思いきり振らなければならない。両極を振れる中で、自ずから本来の位置に収まるだろう。

「人間努力さえすれば何事もできる」とする、《努力至上主義》にも対抗しなければならない。努力してできないことは、いくらでもあるし、人の努力には限界があるのだ。努力至上主義から、吃ってはいけないとする完全主義から、吃音者を解放したい。誤解、反発を覚悟で、「治す努力の否定」は提起されたのである。】

振り子の論理ということは、歴史の中で新しいことを生み出そうとする活動は、振り子の振幅のように、過去の重さに規定されて、大きく振ることが必要になる時がある。変革には、誤りや行き過ぎはつきもので、失敗を恐れては何もできない、というようなことだと思えます。ただ、そのようなことは、過去を振り返った時に、行き過ぎであったと反省するか、後世の歴史家のような第三者的な立場から出されることです。

ところが、よく理解できない文なのですが、この筆者は、「宣言」が「本来の位置」にあり、初めから「治す努力の否定」は本来主張することと違った一誤りであると知っていた。

だけど、振り子の論理を考えて、一度大きく振り、それで最終的に自分の正しいと考える方向（「宣言」的な方向）を歩み出す方法を考えた、という話のようです。このような発想—考え方はどうも私には理解できません。二つ程疑問を呈しておきたいと思います。

まず、最初に考えるのは、果たして、「治す努力の否定」の提起が本当に必要であったのか、かえって混乱を生み出しただけではないか？という疑問です。

筆者は、「治す努力の否定」がこれまでの「治すことへのとらわれ」の対極にあるという考えをもっているようです。そこで振り子ですが、この振り子の動きと、「宣言」の「気持ちのもち方を変える」という運動へ踏み出す動きとはどういう関係があるのでしょうか？ただ、固定していたものが、動くことによって流動化し、新しい方向へ踏み出し易くなった、という意味しかありません。それならば、別に「誤った」「治す努力の否定」など出さずとも、初めから、自分が本来もっていた考えを出せばそれで済むはずで、それに対しては、「治すことへのとらわれ」が大きくて大きな衝撃力を必要とした、という論理のようです。

だが、そもそも言友会が打ち出した「治す努力の否定」とはなんでしょう？

障害者運動の新しい流れの中で、「治す努力の否定」というようなことが、打ち出されました。【「精神病」者における「狂気」の「正当性」の主張とか、リハビリテーションの論理に対する批判とか、「発達保障論」に対する批判とか、また、それは障害個性論として端的に示されています。】そのような論理は、むしろ「治るのか治らないのか」という論理を超えて、「障害」を負価値とすること自体を問題にしています。「宣言」の冒頭でも「どもりは悪いもの、劣ったもの」と、同じように問題にしようという姿勢が見られなくはありません。けれども「宣言」は冒頭でそのことを問題にしつつも、治る可能性を見だし得ないから、別な道を探そうとしています。「治す努力の否定」が一般的に遣われている「治るか治らないかに関係なく、別な道を探そう」ではないのです。

言友会の「治す努力の否定」は「羊頭を懸げて狗肉を売る」—「看板に偽りあり」の類いのことです。実際の内容は「治す努力の留保」にすぎません。言葉を間違えて使用しているのです。それも、単なる間違いではなく、間違いと知っていて、意識的に言葉の置き換えをしているのです。

筆者は衝撃を与えるために「治す努力の否定」ということを打ち出した、と言っているようです。しかし、筆者自身が言っているように、「治す方法を見だし得ないから、別な道を行こう」ということにすぎません。そんな中途半端な論理では、どのような衝撃を生み出し得るのでしょうか？却って混乱を生み出したにすぎないのではないのでしょうか？

もう少しこの問題で、補足説明しておきます。以前、『吃コミ』の中で、「宣言」は180度のコペルニックス的転換をなしたという文がありました。もし、「宣言」が180度のコペルニックス的転換ならば、「治す努力の否定」はどうなるのでしょうか？200度の転換ということになるのでしょうか？では200度の転換とは、180度の転換よりも大きな転換なのでしょうか？200度の転換とは160度の転換しかなしていません。200-180=20、この20

度は、運動の混乱をしか意味しないのです。そもそも、「宣言」がコペルニクスの転換ならば、「治す努力の否定」は文字通りの蛇足なのです。

コペルニクスに譬えれば、コペルニクスが、地球の周りを太陽が回っている天動説を批判して、太陽の周りを地球が回っているという（これまでの考えを根底的に覆す）地動説を打ち出すのに、地球中心の宗教的世界観を批判するとして、「地球の周りを月が回っているのではない、月の周りを地球が回っている」などという論理まで持ち出す必要はないのです。筆者の言っていることはこのようなことに過ぎない。それは混乱を生み出しただけではないでしょうか？

だが、言友会の似非「治す努力の否定」にもし何等かの意味があるとしたら、それが吃音者への抑圧に対する反発を含んでいたからだと思います（今回の「治す努力の否定」の撤回としかとらえられない文は、そのような反発も引っ込めてしまうという意味ももっているのでは？）。「宣言」がコペルニクスの転換で言えば、180度の転換でなく、90度の転換で、「治す努力の否定」が100度の転換に位置していた時です。振り子の理論の意義も、本当は180度の転換をなしたいけれど、当面は、言わば90度を目標としよう、そのために100度の「治す努力の否定」を打ち出そうとする時です。

このような陰謀術策については次ぎに批判しますが、彼は、今回、改めて、「宣言」が最終目標であったと言っています（これも、また陰謀術策である可能性がありますが、そんな陰謀術策には、もう誰も付き合わないでしょう!!）。そこでは「治す努力の否定」は運動に混乱を持ち出したという意味しかありません。

さて、彼の陰謀術策—振り子の論理には、「ちゃんと言っても分からない人達だから、嘘を言っても、引っ張ってやろう。」というような、彼の運動に対する考え、彼の尊大さと、吃音者に対する彼の蔑視が孕まれています。彼の「治す努力の否定」に対して、まじめに対話—批判をしていた吃音研究者に対して、舌を出して「あれは嘘だったんだよ！」と嘲るような、基本的人間関係における信頼関係を覆すような振り子の論理です。この「治す努力の否定」の否定を巡って、言友会内で、又関係者の間でけんけんがくがくの論議が交わされてきたのではなかったのでしょうか？筆者はそれを筆者が本来考えていたことと違った、撤回しようというのです。今までの議論は、無かったことにしようと提起しているのです。では一体この10数年は、10数年の混乱としか言いようのない状況はなんだったのでしょうか？

そもそも、私たち吃音者に対して、吃音の臨床家が、時には営利主義的なことも含め、「治るという暗示をかけることによって、どもりは治るんだ。」として、「治る、治る」と叫び続けることに対して、そのことが現実と食い違う時に傷つく吃音者の立場で、吃音者は批判を続けてきたはずです。

その吃音者が、なぜ、吃音者の仲間をだますようなことをするのでしょうか？振り子の論理というのは、吃音者の仲間を振り子に乗せて振り回した、ということにすぎません。吃音者の集まりである言友会の会報に、そのような文を書ける人がいるのだとはとても信

じられない思いです。そんなことを載せてしまう編集者達!!言友会とは一体どういう集まりなのでしょう!!

【さて、この「治す努力の否定」の項は、まだ終わっていません。私の疑問に対する返答がそのことの中に出てくるかも知れません。でも、吃音者の信頼関係をなくさせるような文だという批判に対する返答だけは、紙上で書いて貰いたいと思います。】

杉本博幸（東京）

（全言連への対話シリーズ 『吃コミ』投稿 NO. 2）

文が長すぎるのではという思いがあります。【 】は、省いてもらっても構わないとくくりました。これに関しては一任します。